

私が会社に就職した1970年は高度経済成長の真ただ中であり、生活が年々豊かになっていることが実感される時代でした。その高度経済成長を担っていたのが、家電製品、自動車の製造販売や石油化学工業、鉄鋼生産などの産業であって、これを推進したのが科学・技術の発達であり、現在の日本や欧米先進国の豊かさは科学・技術の発達によるものであることが明らかです。

しかし、科学・技術にはマイナス面があり、1970年には、すでにそのマイナス面が公害問題として表面化しておりました。ただ、公害はその後自動車排ガス処理技術、排煙脱硫技術、排水処理技術により改善され、日本では以前のような大気汚染、河川の汚染はなくなりました。

同じ頃に問題となったのが、フロンによるオゾン層の破壊でした。フロンは毒性がない、火災の危険性がない、腐食性がないという、極めて優れた性質があって、冷媒、発泡剤、洗浄剤など、広く利用され、私自身も扱ったことがあります。このフロンがオゾン層を破壊する原因だということは、化学者として、フロンこそは科学の勝利だと考えていた私自身にとって大変ショッキングでした。

それでも、当時は私も含め、多くの科学・技術者は、問題は科学・技術の進歩が解決するのではないかと考えておりました。

ところが、現実には地球規模の問題である地球温暖化、熱帯雨林の減少、資源の枯渇、水資源問題、放射性廃棄物処理などは全く解決されず、悪化の一方です。これらは、大量生産、大量消費、大量廃棄という、現在の経済成長を進めようとする産業の基本的な考え方に起因するものです。

科学・技術は、残念ながら多くは経済成長の推進に利用され、問題解決より悪化を推進しておりますし、安全だといっていたものがそうではなかったBSE事件や原発事故などでその信頼を失いつつあります。地球は閉鎖系ですから、このままでは破滅することはあきらかたで、技術者として私も後世に責任を感じており、パラダイム変換として縮小社会という考えは重要と考えています。

皆様方は西遊記をよくご存じのことと思います。三蔵法師に従うまでの孫悟空は、筋斗雲に乗り、ひととび十万八千里という能力を持っていた手におえない暴れ者なのですが、お釈迦様から私の手の中から出られるかといわれ、筋斗雲にのり、雲の中にある柱に名を書いて戻ったところ、その柱は釈迦の指であり、孫悟空は釈迦の手から出ていなかった、という話があります。

釈迦の手をどのように解釈するかはいろいろあるのですが、私には釈迦の手は自然の摂理であり、人間はジェット機で地球上を飛び回っても、地球という閉鎖系、自然の摂理から逃れられない孫悟空のように感じられます。

であれば、孫悟空たる人間や科学・技術に「緊箍児」をはめてわがままを抑制しなければならないのではないかと考えております。